



## 元森 絵里子教授 (専攻 教育社会学、歴史社会学)



### (1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

---

教科書的な言い方をすれば、実体的にこれと指し示せるものではないけれど、私たちの行為や価値観を規定している「何か」を「社会」と呼び探求しましょう、ということになるのでしょうか。

「何か」とは、おそらく、具体的な対象のことではありません。周りを見渡せば、社会学を名乗っている人が研究しているものはたくさんあります。法学や経済学や政治学が扱う対象は、法律だったり市場だったり国家だったり、具体的な制度があります。社会学は、そこまではっきりとしない、家族だとか階層だとか文化だとかいったもやっとした領域に、「何か」を見つけ探求しているのかと思います。(具体的な制度のもやっとしたところの研究もあります。)したがって、対象としては何を選んでも社会学となるのでしょうか。

しかし、具体的な対象が何であるかにかかわらず、明らかに社会的でないものというのは存在します。他の先生方も書いていらっしゃるように、社会学の肝は物の見方やアプローチにあるのかと思います。個人的悩みや社会的な問題、逆に当たり前すぎて意識にも上らないような事柄の背景に、個人の心や体に回収されない「何か」を見つけてしまうこと。それが社会学の一步ではないでしょうか。

私自身もすでにそうであったように、「国家」とか「権力」とかがあたかもそこにあるかのように語れた時代を知らない世代は、まず、その「何

か」の手触りをつかむところからスタートしなくてはいけないのかもしれませんが、そのような作業は、すぐに仕事で使えたりうまく世渡りをしていくのに役立ったりはしないかもしれませんが、立派な社会勉強であり、今後の人生を支える知の習得と言えるのではないのでしょうか。

ところで、「何か」とその仕組みを教師や本に教えてもらって、驚いたりワクワクしたりするのは、ほんの入り口です。その先には、自分で「何か」を見つけ、その説明をしたり、仕組みの解明をしたりする作業が待っています。そして、何でそうなのか？ ではどうしたら？ といった一見簡単なようで恐ろしく難しい問題にぶちあたり、答えのない世界へと突入していくのです。そうすると、そもそも社会って何だっけ？ 社会を発見しているのは自分なわけで...?? 社会について語っている自分も社会の中にいるのだから語ったことは社会に影響するから...うーんと...??? と、「社会」と「社会学」はますますわからなくなっていくのです。トホホ。(ワクワク?)

**(2) 先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。**

---

「教育社会学」担当ですので、まずは教育社会学の特徴について、よく言われることを2点述べます。

第1に、教育社会学とは不思議な学問で、専門的な雑誌を見ると、教育社会学は教育学か社会学かを定期的に議論しています。例えば医療社会学は医学か社会学かなどと迷ったりしないと思うのですが(憶測ですが)、教育社会学は迷うのです。図式的に言えば、教育学は当為(べき)の学、社会学は事実(である)の学と呼ばれます。その両方を名に持つ教育社会学は、伝統的に、教育(制度、政策、方法)はどうあるべきかに関する関心が強かったと言えます。教育がどうあるべきという特定の価値観を前提に、実際に教育がどうであるかを「評価」したり、逆に、教育がどうであるかを調査して、教育がどう

あるべきかを考えようとしたりという志向が強かったのです。最近では、特定の前提を強く置きすぎることへの反省が高まっていますが、いずれにしても、この「べき」への志向性とどう向き合うかは重要です。

第2に、一口に教育といっても、あえて分ければ2つの対象があると言えます。1つは教育と社会の関係、もう1つは学校教育内部の事象です。前者に力点を置けば、教育は人間形成に関わるものであるから、社会形成にも関わるという前提のもとに、教育の社会的機能を探求していくこととなります。後者に力点を置けば、学校内部での教師—生徒関係や、生徒同士の関係を解明していくこととなります。もちろん、双方を視野に入れておくことが大切となります。

さて、私の授業のスタンスは、「である」の学問である社会学の観点から、この「べき」志向が何かも含めて教育の歴史を考えるというものです。また、研究者としては、学校教育制度そのものよりも、「子ども」という想定が何なのかに興味を持っています。私たちにとって「子ども」は社会の要だという感覚は強いものです。だから、規範的な語りからは逃れにくいし、教育改革は関心を集めます。でも、果たして、その前提は自明のものなのでしょうか。

歴史的に見ても、日常の様々な局面を見ても、「子ども」と「大人」を区別するのは必ずしも自明のことではありません。しかし、教育の場においては、学校という場があることで、「子ども」と「大人」の境は目に見えてしまうし、「子ども」たち独自の秩序も実際に存在してしまいます。つまり、「子ども」という観念は、フィクション(作りごと)なのかもしれませんが、具体的な学校という制度を媒介に、しばしば実体(現実)として目の前に存在してしまふのです。それがまた「子ども」を大切だと思ふ人の注目を集めてしまつて、「子ども」の「危機」や、それによる「教育」や「社会」の「危機」について、あたかも自明のことのように語られてしまつたりします。

このような、フィクションのようで実体的なような「子ども」のあり方と、それをめぐって様々に語られる「子ども」や「教育」や「社会」について、言葉の分析から考えています。最近では、より広く、児童福祉や少年司法、消費文化の世界など、教育とは異なった領域の「子ども」についても検討しています。この成果の一部を、「子どもの歴史社会学」の授業でお話しています。

### (3) 1～2年次で読んで欲しい本

---

1. 『社会科学と社会政策に関わる認識の「客観性」』（マックス・ヴェーバー 岩波文庫 1904=1998）社会科学とはどうあるべきかを、認識論と方法論の双方から論じた古典。「客観的」であるとは、「価値自由」であるとはどういうことかを論じています。
2. 『まなざしの地獄：尽きなく生きることの社会学』（見田宗介 河出書房新社 2008）1968年の少年による連続射殺事件について考察した古典的論文が単行本化されたものです。個別の事件を例外事例や個人の心理の問題に解消せず、社会の問題として描く試みは、その怪しさも含めて社会学とは何かを考えるよい題材です。
3. 『近代とはいかなる時代か』（アンソニー・ギデンズ 而立書房 1990=1992）モダニティとはどのような運動を孕んだもので、日本語で「現代」とも呼べるような20世紀末とはそのどのような展開の先にあるのかを論じたもの。本当かなという部分もあると思いますが、20世紀が歴史に見える世代の皆さんは、とりあえず勉強してください。
4. 『現代日本の感覚と思想』（見田宗介 講談社学術文庫 1995）同じく、戦後日本社会がどのように変化したのか、勉強してみてください。「第I部 現代日本の感覚変容」で、1945年から1990年までを、15年ごとに「理想の時代」「夢の時代」

「虚構の時代」と位置づけています。(第Ⅱ部は1980年代に同時代を語ったエッセイ。これも読ませます。)あわせて、1990年代以降を考えた『虚構の時代の果て』(大澤真幸 ちくま新書 1996)、『不可能性の時代』(大澤真幸 岩波新書 2008)も読み、あなたならその先の時代をどう名づけるか考えてみるとよいでしょう。

5. 『時間の比較社会学』(真木悠介 岩波現代文庫 2003) 初出は1981年。歴史の時間に習うような直線的な時間感覚は普遍的なものか、さまざまな時代や地域を縦横無尽に動き回りながら、近代的時間感覚を相対化していきます。「比較」という手法も注目ポイント。真木悠介は見田宗介の筆名です。
6. 『希望格差社会:「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』(山田昌弘 ちくま文庫 2007) 少し古くなってきていますが、豊富な資料を読み解きながら、21世紀日本は未来に希望が持てない不安定な社会になりつつあるという診断を下しています。教科書的な構成になっているので、現代にいたる社会状況と社会的・政治的議論の前提を把握するのに便利です。
7. 『犯罪不安社会:誰もが「不審者」?』(浜井浩一・芹沢一也 光文社新書 2006) 最近治安が悪化している、「安全神話」の崩壊などといいますが、本当に治安は悪化しているのでしょうか。悪化していないのであれば、なぜ悪化しているのでしょうか。社会学的なものの考え方を、データの見方と併せて教えてください。
8. 『学校って何だろう:教育の社会学入門』(苅谷剛彦 ちくま文庫 2005) 中学生新聞に連載された記事です。つまり中学生向けです。しかし、皆さんが今まで12年間当たり前に通ってきた学校という世界を、社会的に見直す目線を与えてくれますので、一読してください。
9. 『フラット・カルチャー:現代日本の社会学』(遠藤知己編 せりか書房 2010) サブカルチャーから政治まで、同時代の諸事

象を読み解いた論文集。少々古くなってしまいましたが、社会的に事象を切るといえるのはこういうことか！という事例集になっています。分厚いので、興味あるテーマだけつまみ食いするのもOK。実際に社会学するというのはこういうことなのです。

10. 『アクティブラーニング：学校教育の理想と現実』（小針誠 講談社現代新書 2018）「詰め込み式でカリキュラムをなぞるだけでは勉強ではない。もっと子どもが主体的に学べる授業にせねばならない」という思想が、戦前から何度も形を変えて繰り返されている、アクティブラーニングだってその一つだ、ということをも明らかにした本です。教育を論じようとする前に、まず読みましょう。

#### (4) 3～4年次で読んで欲しい本

---

1. 『後期近代の眩暈：排除から過剰包摂へ』（ジョック・ヤング 青土社 2007=2008）戦後型福祉国家が凋落し、新自由主義がグローバルに広がる20世紀末以降、不安定さの感覚や剥奪感がどのようにして広がっているかを考えた本。移民問題、テロリズム、貧困といった現代的問題を切り口に、現代社会がどのようにして人を排除していくかを明らかにしている。同じ著者の『排除型社会』（洛北出版 2007）も併せて読むとよい。
2. 『〈子供〉の誕生：アンシャン・レジーム期の子供と家族』（フィリップ・アリエス みすず書房 1960=1980）昔の絵の中の子どもは可愛くない！昔の書物を読むと子どもを大人から隔離して育てようという感覚はない！そこにいるのは「子ども」ではなく、「小さな大人」なのだ！と、「子ども」とはそれを見出すまなざしの相関項であることを、膨大な資料から明らかにした歴史書。子どもや教育を考えようとしたとき、読まなくてはならない本

です。個人的には、『春画のなかの子供たち：江戸庶民の性意識』（早川聞多 河出書房新社 2000）も衝撃的ですが。

3. 『教育言説の歴史社会学』（広田照幸 名古屋大学出版会 2001）日常会話やメディアを通して、「教育的配慮をせねばならない」「学校や家庭の教育力が低下している」「少年犯罪が凶悪化している」などといった言葉を信じていませんか？ そのような「あたりまえ」を歴史的資料や統計データから問い直していく論考を集めた本です。少々古くなってきていますが、誰もが経験しているがゆえに安易に語れてしまう教育問題の見方を身につけるには、未だ役に立ちます。（同著者の『日本人のしつけは衰退したか』（講談社現代新書 1999）や広田照幸・伊藤茂樹『教育問題はなぜまちがって語られるのか？：「わかったつもり」からの脱却』（日本図書センター 2010）などは、1, 2年生や高校生にオススメです。）
4. 『学校と社会／子どもとカリキュラム』（ジョン・デューイ 講談社学術文庫 1900/1902=1998）「子どもの個性と自主性を尊重した教育を！」と声をあげるときに必ず参照されるデューイ。でも、実際に読んでみると、そんな印象をずいぶんとはみ出ることもしばしばあります。プラグマティズムの思想家としてのデューイとあわせて読むと、戦後日本の教育言説が何を読みとって何を無視したかが見えてくるかもしれません。
5. 『ディスタクシオン：社会的判断力批判』（ピエール・ブルデュー 藤原書店 1979=1990）生活様式から趣味までもが生まれた階級によって規定されているということ、学校も階級の再生産に寄与していることを、豊富なデータから明らかにした大著。日本と文脈が違うので、わかりにくいところもあるかもしれませんが、階層や格差の再生産といったことを考えるときに経なければいけない本です。学校に焦点を当てた『再生産』も。
6. 『社会の教育システム』（ニクラス・ルーマン 東京大学出版会 2002=2004）ルーマンならば『社会システム理論』や『近代の

観察』をあげるべきかもしれませんが、専門の観点からこれを。システム論の語彙がわからないと苦戦しますが、教育現場で起きていることや、教育についての語りの特徴などについて、かなり日常的な感覚に近い分析をしています。教育のことを考えるならば、格闘してみてください。

7. 『性の歴史 I : 知への意志』(ミシェル・フーコー 新潮社 1976 = 1986) ジェンダーとかセクシュアリティに興味ないし...と切り捨てないでください。言説を分析するってこういうことかと染み入ってきます。『知の考古学』とか『言葉と物』より読みやすいし、教育分野ではよく参照される『監獄の誕生』よりも個人的にはオススメです。
8. 『〈若者〉の溶解』(川崎賢一・浅野智彦編 勁草書房 2016) 1960年代以降、時代を語るのに若者というカテゴリーは欠かせないものでした。「反抗する若者」「しらけ」「ニート」...。社会学も、若者のアイデンティティやコミュニケーションを考えてきました。しかし、「若者の〇〇離れ」のような懐古的な視点ばかりが強調される昨今、そのカテゴリーは意味を持っているのでしょうか？今、若者をどう見ることができるのか、若者という枠組みで語る意味があるのか。多角的な論考から考えさせてくれる1冊です。
9. 『子どもをめぐるデザインと近代—拡大する商品世界』(神野由紀 世界思想社 2011) 明治時代にさかのぼり、子ども向けの商品(おもちゃ、服、文具、お菓子、部屋)や消費イベント(クリスマス、節句)等が、どのように登場してきたのかを追った本。一方で玩具をコレクションする大人の世界も登場。子ども向けの産業への就職を考えている人、漫画やアニメから卒業しない大人たちなどの問題が気になる人は必読。
10. 『これからの子ども社会学: 生物・技術・社会のネットワークとしての「子ども」』(アラン・プラウト 新曜社 2017) 私が訳した本です。「子ども」という対象は、非常に具体的な生物学的身体



という側面と、さまざまな技術や社会的な慣習や言説が作り上げている(構築している)という側面とが複雑に絡まりあったものです。社会学は、その絡まりあい方(ネットワーク)を見ていくべきではないだろうかという、これからの時代の子どもを見る社会的視点を明らかにしてくれる本です。難しいですが、ぜひ読んでいただけたらうれしいです。

**(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。**

---

**【著書】**

1. 『「子ども」語りの社会学：近現代日本における教育言説の歴史』(元森絵里子 勁草書房 2009) (2)に書いたことを具体的に分析して試みています。戦前期の綴方教育論、戦後の教育問題言説、遊び場実践のインタビューといった大人の言葉と、中学生新聞、生徒会誌といった子どもの言葉から「子ども」とは何で、「子ども」を語ってしまうとはどういうことかを考えています。
2. 『語られない「子ども」の近代：年少者保護制度の歴史社会学』(元絵里子 勁草書房 2014) (2)で述べたようなステレオタイプ的な教育的子ども観を、歴史から問い直そうとした著作です。学校教育制度と、少年法、工場法、未成年者飲酒禁止法、公娼制(戦前期の国家管理売春制度)をめぐる議論から、様々な年少者像と教育的子ども観のだらしなない関係性を明らかにすることで、「子ども」をめぐる近代とは何かを、「子どもの誕生」式の議論とは一味違った形で考えようとしています。
3. 『多様な子どもの近代：稼ぐ・貰われる・消費する年少者たち』(元森絵里子・高橋靖幸・土屋敦・貞包英之 青弓社 2021)

同様にステレオタイプの子どもたちの歴史イメージを問い直そうとする著作です。3名の研究仲間との共著で、労働する子、捨てられ貰われる子、消費する子を戦前の日本社会はどう見てきたのかを明らかにしています。それは現代の私たちの常識を問い直すことにもなります。「昔の子どもは大変だったんだ」「そういう子に比べたら自分は恵まれているから」なんて薄っぺらい感想が吹っ飛ぶような、歴史の旅を味わってもらえたらうれしいです。

4. 『子どもへの視角：新しい子ども社会研究』（元森絵里子・南出和余・高橋靖幸編 新曜社 2020） 「子どもたちには独自の世界がある」「子ども観は歴史的・社会的に構築されたものだ」。これらは、子どもについて社会学的に学ぼうと思ったら、まず学ぶことになるよくある、「既存の子ども観を問い直す」視角です。しかし、これらで、複雑な現代の子どもや子ども観を捉えることができるでしょうか。「既存の子ども観の問い直し」を、さらに問い直す必要があります。私はこのような枠組みを示す序章を書いています。各章では、社会学者・文化人類学者の仲間たちが、具体的な研究を紹介しながら新しい視角を論じています。

---